

新たな時代の保健体育のアウトカムを考える 「保健と体育の充実に向けた教育課程の可能性」 ——九州体育・保健体育ネットワーク研究会 2016 ファイナル in 福岡——

Consider the outcome of the health and physical education for a new era
“Possibility of curriculum for the enhancement of health and physical education.”:
Kyushu Physical Education and Health and Physical Education Network Conference 2016 final in Fukuoka

佐藤 豊¹・菊 幸一²・森 良一³・高橋 修一⁴

¹ 桐蔭横浜大学スポーツ健康政策学部スポーツ教育学科

² 筑波大学体育科学系、^{3, 4} 国立教育政策研究所

(2016年9月29日 受理)

【要旨】

次期学習指導要領の改訂への作業が進む中、中央教育審議会では、新しい時代に必要となる「資質・能力」の育成や教科横断の視点である「カリキュラム・マネジメント」が議論されている。OECDのDe-Se-Coのキー・コンピテンシー等の流れから、現在の教育は、成果（アウトカム）を考える時代と言え、日本では国立教育政策研究所が「21世紀型能力」を示している。保健体育のアウトカムを考える上では、こうした動向を勘案し、保健体育の目標や学力について、また価値そのものについて考察する必要がある。本シンポジウムでは、「保健と体育の充実に向けた教育課程の可能性」について、「新たな時代の保健体育のアウトカムを考える」というテーマから、菊幸一氏（筑波大学体育系）には「体育史」の観点から、学習指導要領の変遷を踏まえ、今度の学習の課題について、森良一氏（国立教育政策研究所）からは、「保健」の学力をベースにしての今後の方向性を、高橋修一氏（国立教育政策研究所）からは、教育現場の視点から「授業」ベースでの取り組みの提案を、それぞれいただき、シンポジウム参加者との意見交換を行った。

期日：平成28年3月5日（土）

場所：福岡県立スポーツ科学情報センター（アクション福岡）

¹ SATO Yutaka, Department of Sport Education, Faculty of Culture and Sport Policy, Toin University of Yokohama, 1614 Kurogane-cho, Aoba-ku, Yokohama, Japan 225-8503

² KIKU Koichi, Faculty of Health and Sport Sciences, University of Tsukuba

³ MORI Ryoichi, National Institute for Educational Policy Research

⁴ TAKAHASHI Shuichi, National Institute for Educational Policy Research

1. 佐藤 豊 (桐蔭横浜大学スポーツ健康政策学部スポーツ教育学科)

● 21世紀型能力と保健体育の目標

学習によって得られる成果を「アウトカム」とした時、日本の場合は、国立教育政策研究所が定義した「21世紀型能力」が参考となる。学習指導要領の改訂への作業が進む中で、どのような部分が変わらずにどのような部分が変わっていくのか、その中でどのような授業づくりが求められているのか、小・中・高、そして教員養成等も含めて情報共有したい。

体育では「生涯にわたる豊かなスポーツライフを継続する資質や能力の育成」が高校の卒業時の目標であり、「健康の保持増進の実践力」が保健の目標である。「体力の向上」については、現行の学習指導要領では保健と体育を架橋的に結んでいるものであると言える。これらの実現に向けて、どのような授業が求められているのかを考える必要がある。

● 保健体育科における学力の定義

健やかな体を育む教育の在り方に関する体育分野のワーキンググループの報告では、「体育の学力」とは技能のみならず知識、思考・判断、態度が示されている。これに「保健的学力」を統合し、保健体育という教科は、どこに向かうのかについて、本シンポジウムで論議していく。

● 体育の価値

体育の価値には2つあり、体育によって得られるメリット、体育そのものが持つ価値がある。アクティブ・ラーニング、ICT機器の活用等の様々な言葉が出ているが、そもそも体育はこれらの活用が内在している。意図性のある目標やねらい、めあてがあって、それに対してどのような活動を選択して育てていくのが重要であるという視点で授業づくりを考えていただきたい。

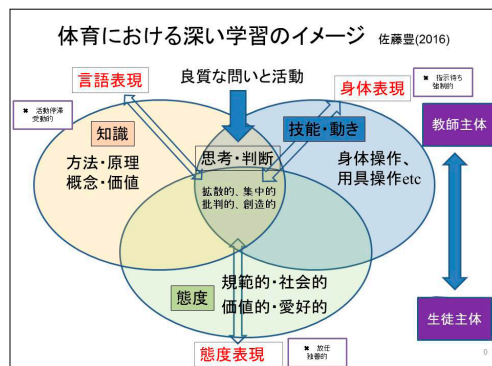
省庁レベルでは、スポーツを通して身につく価値について、例えば、東京オリンピッ

ク・パラリンピックによる、経済の活性化が挙げられる。国民経済の発展に寄与し、健康寿命や医療費の抑制に貢献することである。また、地域社会やコミュニティーの活性化、「Sports for tomorrow」といった発展途上国への支援や様々な形での国際交流、スポーツ活動やアンチドーピング活動も行いながらの国際貢献は、スポーツを通してアピールしたいメリットである。

では学校体育の目標はというと「する・みる・支える」国民の育成、教育の目標は21世紀を幸せに生きる国民の育成である。従って、スポーツという学習活動を通して、最終的に21世紀を幸せに生き抜く国民、主体的に多様性を知りながら、協動的に生きていくことを縦横的にできる人の育成である。そのためには、体育の経験、保健の経験、学習の経験が繋がっていく必要がある。「小学校ではどのようにやれば良いのか。中学校では、高等学校では、どう充実させていけばいいのか」ということを学校現場でも共有できればと思う。

● 体育における表現

思考・判断・表現の「表現」を体育分野でどう捉えるかという問いに対しては、これまで言語表現を指していると思われる。我々が得意とする身体による表現の表出は、「技能」である。また、「フェアなプレイをしようとする構え」や「仲間と協調しようとする構え」、「差のある人たちのことを理解し、自分の行動を出していこうとする構え」等は、「態度」としての表現で、3つの表現スタ



ルがあり、それを体育という学習は、保障してきたのではないかと考える。

●スポーツの意味

我々は、戦うこと（競争）を中心にスポーツを捉えがちであるが、ダンスや体育活動のような非競争的な素材もあれば、協働的、伝承的な素材もある。パラリンピックの理解には、協働的なものを広げて授業で取り上げて行かなくてはならない。協働的な取り組みを求めるのであれば、協働的な素材を教師が提供しない限り、子ども達はその意欲が育ちにくい。スポーツを取り上げる際、「勝つ」ための軸と共に「共同して楽しむ」ための視点を教師が意識することは、男女共習授業や選択制授業が充実したものとなるために重要な捉え方だと考える。

2. 菊 幸一（筑波大学体育科学系）

●21世紀型能力とは

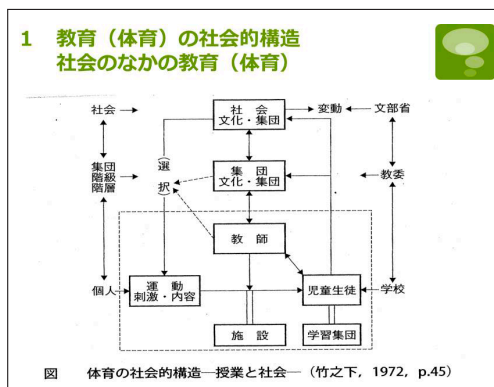
私たちが教育を受けた時には、基礎が大事で、基礎を学んだ上で応用できるのだと教えられた。

21世紀型の社会は、実践力が重視される。学生にパソコンを与えたら、横にあるパソコンの説明書は全く見ず試行錯誤して、そして自分たちの目的を達成する。実践に開かれた関心・意欲をもった「学ぼうとする力」があって、その試行錯誤の中で「学ぶ力」が出てくる。そこで思考・判断している。PISAの

調査結果などグローバルなレベルになると、学力というものが明らかにシフトしていることが理解できる。それに、柔軟に対応できる力は、ある一定のパターンの知識や技能を身に付けただけでは対応できない。

●体育の変容

体育は、明治維新以降においてアウトカムとの関係を強調された教科である。体育は、まさに軍事的あるいは労働力の「アウトカム」として成り立ってきた。第二次世界大戦で、身体を道具化し、最後は若い人たちの身体を破滅させていくという結果を生み出した。そして、戦後。民主的な社会を作らなければならないということで、体育はそれにどう貢献するのかという180度変わる考え方が出てくる。授業は、結局、社会といろんな形で結びついていると、「竹之下休蔵」という東京教育大学の体育社会学の初代の教授が言っている。竹之下は、教育は基本的には社会との関係において動かざるを得ない。ただし、この図の非常に重要な所は、その中心に教師がいるということである。教師の解釈によってそれがいかようにも変わる。だからこそ、教師は子どもとその上にある自分たちが所属する集団や社会、あるいはその外の世界と常につながっていないといけない。そういう関連性に基づくよりよい授業でなければ、アウトカムっていうのは目指せないということ、1960年代から70年代にかけて述べている。そのことからいうと、戦後の日本の体育は、まさに変化に応じて、実はずまくアウトカムを形成してきたと言える。昭和20年代はまさに民主化の時代であり、これは子ども中心主義である。一方で這い回る経験主義ともいわれ、民主主義社会の形成と体育がやっていることとはどのように関係しているのかということに対する批判であった。昭和30年代に入ってから系統学習、とにかく基礎的な知識を身につけて、学んだ力がないとだめだという考え方になった。そして、それを身につけて応用させるという考え方が、昭和40年代まででできた。さらに東京オリンピッ



クや高度経済成長を経て、体力重視の風潮となり、昭和40年代は小学校などの業間体育（総則体育）などになった。その結果、スポーツは好きだけど体育は嫌いだという現象として出てくる。そして昭和50年代に入っ
ていち早く「運動に親しむ」という目標がでてきた。これは、他教科の先をいく体育の特徴だと思われる。そのような流れの中で、昭和50年代以降、「楽しい体育」というようなキャッチフレーズ、子ども達の主体的な学びだとか、あるいは個人差、心と体を一体化するのが体育なのだという流れができてきた。

●習得・活用・探究の関係

学習指導要領で含意されているのは、習得というのは探究が招いていく場合もあれば、やはり基礎的な知識を身につけた上で活用していく場合、両方あるということである。現行においても、これからの21世紀型能力においても、変わらない。これをアクティブ・ラーニングということに関連付けていうと、対話的な学びというのは、基本的にはスモールグループでないと実現できない。そこで重要なのは、子ども達が自発的に活動しようとするということである。それは、運動との関係でいうとプレイすることであり、「欲求」と「必要」とに分かれていて、欲求とは競争だけでなく克服だとか達成していくということも含まれる。「必要」というのは、「体づくり運動」のような健康や体力を必要に応じて自分たちで目標を立てて高めていくもので

ある。

●主体的な学び

「主体的な学び」は、自分の運動課題あるいは目標（めあて）と自分の能力との関係において決まってくる。今回、21世紀型能力を議論している中身は、「学ぼうとする力」と「学ぶ力」と「学んだ力」を、それぞれ「関心・意欲」「思考・判断」「知識・理解」と考えれば、そんなに難しいことは言っていない。21世紀型能力は社会との関係で要求されている。それを教育の段階でどういう成果として結び付けていくのかが重要である。

●ねらいに直結した学習のサイクル化

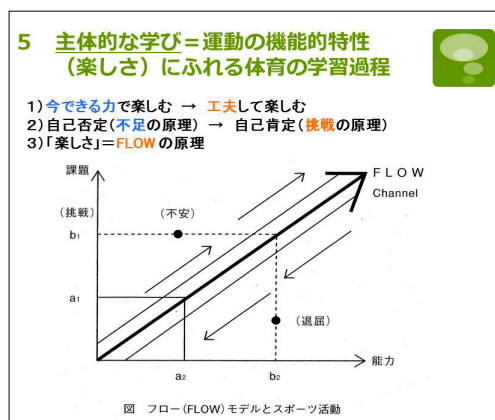
最後に、学習というものを「学ぼうとする力」「学ぶ力」「学んだ力」をサイクルとして、まさに「アクティブ・ラーニング」していくことをいかに組織化するのかということ、実は日本の長い体育科教育の歴史の中で達成できてない課題だということである。指導を組織化することはいくらでもできるが、子ども達の側から学習を好んでやって、それをいかに指導するねらいに結び付けて学習をサイクル化（組織化）するかが、これから求められる大きな課題ではないかと思う。

3. 森 良一（国立教育政策研究所）

●保健の学力

学習指導要領改訂に向けて、「学力」に基づいて育成すべき「資質・能力」というものを明確にしていこうというような話になっている。その「学力」は、知識・技能、それらを活用して身に付く思考力・判断力・表現力等、そして主体的に学ぶ態度の3つである。資質能力も基本的にはそれらに沿って考えられている。

保健に話を絞ると、1つ目は「健康な生活を送るための基礎となる知識・技能」、2つ目は「自らの健康を適切に管理し、改善していく力」。これは、思考力・判断力・表現力等に関わる場所である。最後が「健康の大



切さ、健康の保持増進に向かう情意や態度等」、この3つが、今のところ保健で考えている「学力」と捉えている。

●保健と体育の連携

保健には高等学校の内容に健康の考え方というものがある。例えば、病気との裏返しという考え方から、現在では生きがいかQOL（生活の質）という考え方に変化してきている。そのような考え方は、保健体育の最終的な明るく豊かな生活の実現という目標につながっている。従って、保健も体育も最終的なゴールは一緒なのだが、そこへのアプローチは若干違うところがある。それで今まではバラバラにやってきた感があるため、共通的なところを議論しながら深めていけるようなシステムにしていく必要があると考える。

●保健学習におけるアクティブ・ラーニング

アクティブ・ラーニングは3つの視点、深い学び、対話的な学び、主体的な学びがあり、この3つの学びからアクティブ・ラーニングを考えていきたい。深い学びというのは、どちらかという課題解決的な学びが中心になる。対話的な学びというのは協働的な学びである。そして主体的な学びがある。特に、保健は健康課題をどう解決していくかということが中核になる。しかし、今、世の中に出た時に健康を保つためには当然対話的にならなければいけないし、自分の健康というのを優先的に考えるという主体的な力というのも求められる。そういった三つの視点から保健の授業を考えるとどんなプロセスが必要なのかということを考えているところである。

●保健学習におけるカリキュラム・マネジメント

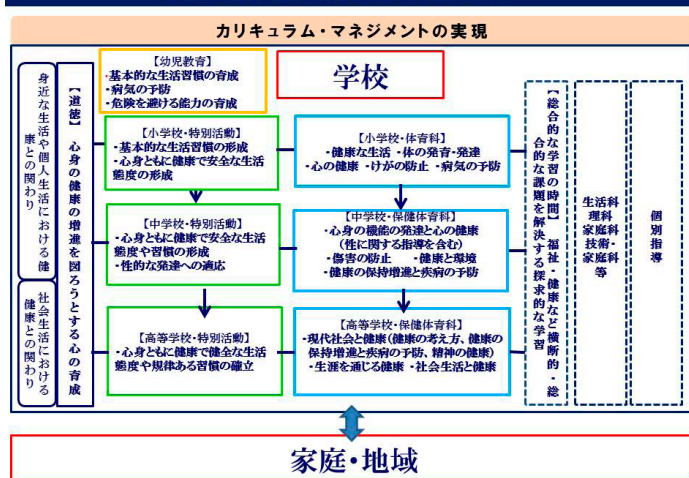
カリキュラム・マネジメントは、教育活動や組織運営などの学校の全体的な在り方の改善に関わるものであり、1つの教科だけでなく、健康に関わる教科等や、個別指導、

それと家庭・地域などとの連携も視野に入れて資質・能力を育成していくことが大切となる。全体のイメージを構造化していくことで、保健のカリキュラム・マネジメントが見えてくる。アクティブ・ラーニングとカリキュラム・マネジメントという2つをセットに考えることによって、子どもたちに求められる資質・能力の育成がなされる。

●心の健康と運動

授業実践について紹介する。今、心の健康と運動の関係が重要視されている。運動することが心の健康にプラスになることは承知の事実だと思う。心というのは様々な経験や学習によって成長していきますよということを小学生に納得させる授業だが、例えば、同じ場面において、5歳と5年生での対応や考え方の違いを考えさせる。例えばボール運動や遊びをしている場面において、幼い頃に比べて5年生ではルールとか、作戦とかが身につくという心が発達するということが見えていく。こういった事例をいくつか使って、運動というのは、その中に人との関わりや、運動の内包する価値があり、その経験によって心が発達していくのだよというもの一つ考えられる。疾病予防についても、医療費との関係や、生活習慣病の予防と運動が関わっている。また、保健医療機関の活用というところで、運動と健康に関わる保健医療サービスを教材

心身の健康の保持増進に関する教育のイメージ



に内容を深められないか、検討している。

4. 高橋 修一 (国立教育政策研究所)

●全国体力・運動能力、運動習慣等調査より

下の左図は平成26年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査の結果である。子供の発達の段階を考えると、中学校が一番難しい時期ではないかと思う。例えば、一生懸命にやるのが恥ずかしいとか、「俺、やってるよ」という姿を見せるのが恥ずかしいという時期ではないかと思う。さらに、中学校の先生が大変だと思うのは、生徒が難しい時期でありながら、小と中、中と高の接続や系統性を踏まえて指導しなければならぬということである。体育、保健体育を指導する我々は、それぞれの校種の状況を理解しつつ、お互いにリスペクトし合いながら、12年間を見通して、豊かなスポーツライフの実現を目指して指導していきたいものだと思う。

下の右図は、「もう一度やりたいですか」という問いに対する回答である。その中でも「もうやりたくない」という回答で、小学校、中学校、男女ともにある程度共通しているのが、器械運動系と陸上競技系の領域である。また、体育理論で「もうやりたくない」と回答している生徒の割合は低いという結果になっている。指導方法の在り方の工夫によって、生徒がスポーツの価値や文化的意義等を確実に理解し、「する、みる、支える」などのスポーツとの多様な関わりが実践できる資質や

能力の育成につながってもらいたいと思う。

現行の学習指導要領は、発達の段階を踏まえて、4・4・4で内容が整理されている。ボール運動系・球技領域の技能の指導内容を見ても、中学校第1学年及び第2学年でも小学校第5学年及び第6学年と同じように、「簡易化されたゲーム」と示されている。ゲームにおけるルールなども含めて、専門的になりすぎることがないように、改めて学習指導要領及び解説を確認いただき、生徒の実態を踏まえて授業を組み立てていただきたいと思う。

授業づくりについては、「技能(運動)」「態度」「(知識)思考・判断」をバランスよく育むことができるようにすることが大切である。特に「態度」「(知識)思考・判断」の指導場面も適切に設定し、評価することが大切になる。また、それらの資質や能力が高まっているという「自覚」を子どもたちに持たせることが必要である。子どもたちが、体育の授業は技能だけではなく、態度を学んでいる、知識を学んでいる、思考・判断を行っているということを自覚した上で、「態度が身に付いている(高まっている)よ!」「思考する力高まっているよ!」と認めてあげることが大切である。そのためには観点別学習状況の評価も確実に行わなければならない。そうすることによって、生涯にわたる豊かなスポーツライフの実現につながっていくと考えている。

●次期改訂に向けて

次期改訂に当たっては、インクルーシブ教

体育・保健体育の授業の充実 (平成26年度全国体力・運動能力・運動習慣等調査)					
体育の授業はできましたか・楽しかったですか(小学校)					
できた:(よくできた+ややできた)、楽しかった:(楽しかった+やや楽しかった)					
	男子		女子		
	できた	楽しかった	できた	楽しかった	
体づくり運動	81.5%	80.7%	81.2%	81.8%	体づくり運動
器械運動	75.5%	78.7%	75.6%	80.7%	器械運動
走・跳の運動	82.4%	85.4%	74.1%	78.0%	走・跳の運動
深く・泳ぐ運動	80.5%	89.3%	79.7%	90.3%	深く・泳ぐ運動
ゲーム	90.0%	92.8%	77.6%	84.2%	ゲーム
表現運動	59.8%	61.8%	76.9%	79.6%	表現運動
体育の授業はできましたか・楽しかったですか(中学校)					
できた:(よくできた+ややできた)、楽しかった:(楽しかった+やや楽しかった)					
	男子		女子		
	できた	楽しかった	できた	楽しかった	
体づくり運動	79.5%	69.5%	75.9%	66.9%	体づくり運動
器械運動	62.9%	65.0%	58.8%	63.4%	器械運動
陸上競技	70.0%	69.5%	58.8%	57.6%	陸上競技
水泳	64.3%	72.1%	57.5%	65.3%	水泳
球技	82.6%	88.7%	72.0%	82.6%	球技
武道	59.1%	61.8%	50.4%	52.6%	武道
ダンス	46.9%	49.2%	68.1%	71.5%	ダンス
体育理論	50.5%	42.5%	46.7%	36.1%	体育理論

体育・保健体育の授業の充実 (平成26年度全国体力・運動能力・運動習慣等調査)					
もう一度やりたいですか(小学校)					
やりたい:(授業以外でやっている+授業以外でやってみたい+授業をやってみたい)					
	男子		女子		
	やりたい	やりたくない	やりたい	やりたくない	
体づくり運動	78.5%	9.4%	81.4%	7.8%	体づくり運動
器械運動	77.1%	13.2%	83.1%	12.0%	器械運動
走・跳の運動	86.6%	7.8%	79.3%	13.1%	走・跳の運動
深く・泳ぐ運動	93.2%	5.7%	99.1%	5.0%	深く・泳ぐ運動
ゲーム	99.7%	3.1%	87.5%	8.1%	ゲーム
表現運動	54.0%	20.6%	76.8%	9.3%	表現運動
もう一度やりたいですか(中学校)					
やりたい:(授業以外でやっている+授業以外でやってみたい+授業をやってみたい)					
	男子		女子		
	やりたい	やりたくない	やりたい	やりたくない	
体づくり運動	62.7%	16.0%	57.6%	16.7%	体づくり運動
器械運動	56.4%	20.3%	53.9%	23.9%	器械運動
陸上競技	64.9%	18.8%	52.5%	30.2%	陸上競技
水泳	66.6%	12.0%	60.0%	18.4%	水泳
球技	91.7%	5.5%	84.4%	10.4%	球技
武道	53.9%	19.7%	42.3%	26.3%	武道
ダンス	38.7%	23.7%	64.6%	13.0%	ダンス
体育理論	37.7%	15.4%	29.7%	14.8%	体育理論

育システムの趣旨を踏まえて作業を進めなければならないと考えている。スポーツを通した共生社会を推進していくためにも、生涯にわたって豊かなスポーツライフを実現していくためにも、大切な視点になってくると思う。

2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会も契機としながら、日本全体の運動やスポーツへの関心を高め、「する、みる、支える、知る」などのスポーツとの多様な関わり方を楽しむことができるよう、基盤となる体育・保健体育の授業を充実する必要がある。

まとめにかえて

本シンポジウムにおいてテーマとした「アウトカム」については、保健体育でこそ身につく資質や能力に焦点化した上で、効果的な学習方法論としてのアクティブ・ラーニングやカリキュラム・マネジメントの視点からの授業の充実が求められていると言えよう。

保健学習における思考力・判断力・表現力、体育学習における技能以外の内容及び発達段階の重視と、保健体育の学習成果の往還など、今後の授業研究の方向性が示唆された。

*本研究は、平成27年度～30年度科学研究費助成事業（基盤研究（B））課題番号15H0364の助成を受けたものです。